

令和5年度 霞ヶ浦学講座第4講
「上高津貝塚と縄文時代の環境について学ぼう」実施結果

実施日時：令和6年3月9日（土）10:00-11:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：一木絵理氏（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）

参加者数：11名（小学生6名 大人5名）

概要

1 霞ヶ浦の今と昔

霞ヶ浦の場所や霞ヶ浦がいつできたのかなど霞ヶ浦の歴史や上高津貝塚について学習しました。



霞ヶ浦のなりたち

霞ヶ浦は日本で二番目の大きさの湖で、平均水深4mととても浅い湖です。淡水湖になります。

霞ヶ浦は1万年前にくらいにその形ができたと考えることができます。約2万年前（最終氷期）には霞ヶ浦の姿はなく、その当時流れていた古鬼怒川などが、大地を削ったり、砂を運んだりすることにより、今の霞ヶ浦の原型をつくりあげました。

その頃は、とても寒い時代でした。花室川付近では、約3万年前に生息していたナウマンゾウの奥歯の化石が見つかっています。

縄文時代の頃（約7,000年前）は全体的に暖かい時代で、今の霞ヶ浦の周りは海でした。海だった証拠として、霞ヶ浦の周りでは縄文時代の人が食べた後の海の貝殻や海の魚の骨が見つかっています。

2 上高津貝塚

貝塚は、昔の人が食べたゴミ捨て場と考えてよいでしょう。上高津貝塚は、土浦市上高津にある約4,000年前から約3,000年前の遺跡になります。

上高津貝塚では、何種類もの貝がみつっていますが、約9割はヤマトシジミになります。またスズキ、クロダイ、コイ、マハゼ、ウナギなどの骨が見つかっています。

狩猟や漁労も行われ、ヤス（両端がとがった棒状の道具）、銚（もり）などで魚を、弓矢などでイノシシ、ガン・カモ、シカなどをとっていました。鍬（やじり）には石や骨が使われていました。

狩猟や採集した食べ物の調理には土器が使用されました。上高津貝塚でも深鉢型、浅鉢型など様々な土器が見つかっています。

3 ハンズオン（さわってみよう）

上高津博物館から持参いただいた展示品、収集品などをさわってみました。



- 土器 ••• 縄文土器（縄文中期後半 5,000年前の本物、土浦市木田余で発掘）
- 矢じり ••• 様々な形のやじり。（黒曜石でできたものもあり、これは交易によってもたらされたと考えられます。）
- ヤマトシジミ ••• 汽水に生息する貝の仲間。当時海であった霞ヶ浦にそそぐ桜川の河口で採っていたのでしょう。
- ハイガイ ••• 西日本に生息する貝で、今は国内でもあまり見られません。当時は、今より暖かい（海水温が高い）気候だったことがわかります。（土浦市下坂田の赤弥堂遺跡（東地区）で発掘。）
- トチの実 ••• 縄文人が食したといわれるトチノキの果実

3 センター展示見学

センター展示室を見学し、貝塚がどのようなものであるかを学習しました。

剥ぎ取り標本 ••• 3つの貝層を見ることができます。（ほぼ貝殻だけの層、貝殻を主体に、土が混じった層、貝殻よりも土が多い層）

また様々な貝とともに土器、魚類や哺乳類の骨も見ることができます。

縄文時代の貝塚は、霞ヶ浦周辺に多くあり、どれも台地のへりにあります。

貝化石 ••• 縄文人は貝製装身具を身につけていました。マルツノガイ、ヤカドツノガイの化石が装飾品にも使われており、縄文人は、そのありかを知っており、活用していたと考えられます。



4 まとめ

上高津貝塚は、筑波山地域ジオパークのジオサイトになります。ジオパークとは「大地の公園」という意味になります。皆さんの周りにも、身近な大地の遺産があると思います。地域の魅力を考えたり、霞ヶ浦の恵みをいかに守っていけるか考えたり、行動してみましよう。

（文責 小川）